箕輪奇談

巻之九

へ13
3383
9

へ 13
3383
9

谷森文庫

常陸国誌巻の九

目録

一 田野郡の事
一 益子義明討死叢塚の事
一 右次郎丸女房と羅漢の事

大正十年八月
本大學出版部

右大将頼朝卷の九

田野倉城の事

[illegible]久下田の軍勢相[illegible]
[illegible]田野城の[illegible]
[illegible]
[illegible]

因幡守時政日頃の大部政良に
敵陣の様子を見せんと登せ
けるに城より鬨の聲の萬里に響
義則加勢として一千八百餘人
三ケ所より討出て日野城の堀際より
陣を構へけるを手石火矢を
ふりくだし卸し早速防禦の
評議せられける義則同案
し

騎兵の備へし防戦して敵將精兵が
箙を討取られ疲れし東城にて撃を
守つく士卒どもへ塀外へ出し
給ふ事なりければ終に時政
急く邊の義勇男子ありしと
いへども此の傍の軍にて北家の力と
備る所なし全く精龍欠すも敵
父子一同る公をとりつくしたるを

馳出して打かゝりしが山中ひるまず戦ひし
あらしかども崇して討れし軍勢も
多かはの寄手も手負て所々に敵し
親しくしが若党郎従防禦の
岩鬼より及びなば其時惣勢ひと
頼みしろ支えんと城の南に十町程
追つて陣を構へうまむかひ
しかしむかつて本陣を出しける

あし警を押止之り然るに義則家
めしくも兵の気ゆり六角城をこして
陣を構ひ十町南なる鎮守
八幡の社地へ惣勢を籠らしく
勝山の峰よりを伺ひたりけるが
扨も久下日数陣取ありと先陣
水谷ゟ万んし重臣一千余人従ひく
水谷出羽守一千五百余人古経として

天を掠め金鐵打出し鬨の声を
上げ喚き叫んで押寄せ来る
城内よりも同じく鬨の声を合せ
双方鳴り渡りや矢を射違へると暫し
城中おし寄せ以て攻めかゝり面しはれ
都臣北条大膳正経先へ乗り馬を進めて
手勢を従へ是は堀の士卒数百騎人
続いて小泉主従三百余人

寄手勝に氷谷勢の先陣真先に進んで
入替り城方も大館紀平小次郎の人数
一度にどつと頭ぶ鋭事ともせず
勇を震ひ是が為に氷谷勢
三河守ずんずんと驟て引返すを
まつこう大将して勢を城兵に小敵ある
御ぞおのおのはやこものどもは動く
続いて会をよし呼はり馬を寄せて

其して いますしけども 羽石方の 鎧ひに
帝らく纐を逃し 金らんと あらすの大小
あし 大難を苦しゃ 中島仁平の勢 治ら
漂ひあるが 無を寄せて 出で給ひ 神をくる事
百余人 ありて 其手勢あるして 人数をまし
あくまで 書ろしく 城中 引上りる
直ちに 熊谷勢 紋をしらず 大将 ひょ
出ておさしが 二陣として 一陣に 押寄る

唯一騎に 城を乗取 事なし 猛勢ならず
後陣 備へ をかためても 早くも 先陣
若城ろくの 兵 加へて ありしが 後陣
すべく 是を 討んに 御の 恥あらんや
味方の 勝利 唯一騎に 打て 討しと
跡より 先陣 熊谷 先陣二陣
熊谷 が子 先陣 二千 余人 百余人
其先を 三ッ巴の 馬印 あらし と 押立

白し蓋と深く藤を[illegible]
嵐[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
小[illegible]
一千[illegible]人と指揮[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]
大船の強と[illegible]
[illegible]小[illegible]
[illegible]強と[illegible]
唯一[illegible]
[illegible]
小[illegible]強の[illegible]

とて一ト云ひ引き
探りたるに小泉
通りて富貴と小泉
たるに小泉
大鍋布袋と水谷
布袋と水谷
小泉と水谷
とげて久保と
こんよ馬と

水谷

大鍋布袋
が強弓と強く
強弓
大鍋布袋
強の達人
大鍋布袋
強の
強の
強の
強の

流石の大鎧も通る程の強弓
馬に乗て通るを射て通
小太郎是を聞て大
しかるに其夜の夢に
紀平大猫と対面して城の
云ひ終て再び大鎧を
うして大鎧と
なげくを久保小太郎紀平大猫

を見付て
して寄手の士
出る光春の
出る弟を久保小太郎
しけ寄を大
いらして
寄手
中の味方の中

紀平大猫
大力と
と矢
光春
駆寄のおとて
合戦
等大猫
大力
強り
所を等き
刑部

又十郎まつ[illegible]ふ[illegible]を対馬を
[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]
四郎と対馬[illegible]が城を[illegible]
対馬[illegible]ものふかうじを[illegible]を[illegible]ふ
[illegible]つ[illegible]城中[illegible]
[illegible]より[illegible]の[illegible]を[illegible]のふと[illegible]
彼[illegible]ゴ[illegible]
[illegible]石[illegible]是[illegible]

[illegible]ふ[illegible]
[illegible]

義弘義別対馬島登城の事

此時義弘一千八百人[illegible]
[illegible]石が城[illegible]
[illegible]谷城と[illegible]

討んとし鬨の声をとゞろかし陣坂村
九郎治上山保昌の宇津郷まで
軍勢を催しゝてよせてとゞまる
崩んとし進みて手引ふて城の門
ひきの坂を乗り破り敷所長へと
向ふ所を攻めて取り鉄砲を筆
撃しかもしれず萬太郎進て入る事
待ちとて御見る水谷情郷入道に

二千余人を二手に分ち黒川
古八の里山を経て園城寺の木戸を始め
御家の勇士書へと並べて萬字が
後ろより左右より實入ぞ討ければ
差ひのみなる萬太郎ひらきけれ
事なれば寒熱山洛を取りて
義仲の方ひも始してある事
張しける事なれば情郷は

討ちて所一騎なりて初秋の末や
ひらん一人なりも討漏もなしと屋ほしく
うづうづ大かたと水車よりもしく
水谷勝よりの家臣を遣はさるる
報を聞くと馬の口取り脱
例の鎧神のごとく
ひらんを惜敵と変化
嘆ずしよりも何とよ思い有まじ

惜敵何をするひらんを
つくんの所を刎ねがおくと聞ひ
車を駆せ来るる水谷惜敵
遣はんとて岩を立てしと
報言ふいざる賢の加勢をうけ
稽の方飛脚を遣はせ異やと
ひつ寄せるそもそもの
金銀飛よ責敵の第五日

[illegible]鎧によろひたると猪首に着て
卯の花縅しに金小札の鎧に綿
[illegible]をなる緋羅紗の陣羽織裾金の
の太刀を佩き谷嵐と名付ける
太く逞しき星栗毛の馬に紫裾濃の
厚房の押掛け金ふくりんの
鞍置て打乗りしが月岸かとみる
[illegible]の大長刀を馬の平首に

引付真中をと睨げけつゝ[illegible]の
青きは[illegible]よりけ大将と名乗て
[illegible]の宮[illegible]九郎判官義経が出立は
萌黄縅し頭形の兜に
金小札の大鎧を着しつゝ[illegible]と
荒海と名付ける[illegible]黒星とかや
名馬に緋の厚房を押かけ
朱塗の蒔絵の鞍を置き銀象眼

お豪みんばかりて縦横無尽なる
池を出る
萬る万般付舎居上村肥前守の
宇津郷達鳥羽出まつて勇士
振ひ実戦を着氷谷陣龍と出済る
義則し大将旗を捨じく
親し育目龍兎の如く双方れ
士率勝らつと早くて揺ふて取る

大将我戦ひ二怒合に及びたる陣龍
しらつて切返旗先萬る宮陣浦
旅々掛あく馬と蹴を向形よ
あつて陣龍と切て落さんとして
いかけまきゆを持る長刀とずへを
落をば陣龍降らもし長刀とを
出し義則とぎろてを切て落しもが
悦士そしてまろく首とを

義経行年三拾一歳にして
萬治が士卒もとしを此所に於て
討死を三千八百貫の所領此時に
没収されて尚軍法蔵人時を経て死
素より白野城る御家に入て惣軍を
合し頼朝本丸をせめ立焼草を
乗くるゝ火を付殿舎の内なりけ
入きしかもえしりしが忽ち火焔上て

本丸一番に真先として恐れる敵原
進退窮まりて士卒避易して落
うちとるも何ては討死をとげ
しかば大将御意時終日寿男
太郎政義命じて是まで来りし矢倉
の中にて心静かに生害におよばれ
たりし是よりて氷谷が勢ひしかりぬ性
なるを始て其後御書に座し

三代目の母なる寛永年中高野
弘報院にて政昌と名乗るさて
また義朝別墓を志賀と
いふ所に立て置るを高尾長舟
[illegible]
の長谷川義元より仕へ富田
長元と篠原の義元没後の後
下野佐野の娶より

一人の姫ありて、同村の長百姓
娘を妻としふうふ
睦まじく暮しける
ふたりの間に男子
もうしを設けて
家元を継ぐ

云明命書と雑別の事

男も又家元を云明命として世嗣出給ひ
家元を継ぎ商売に出給ひ
事ふかひ
年月一回家元を尋
ねて
娘の事申
聞せ
おきなと上て

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

嬉しげに世に類なし父上の盆祀
琴忍んでも忘れず抱き月
孫丈の身にわかれ沢のをる事ども
其れより曽我と改て兄弟月さらぬ
時なを遠くうつらのよろこびに身
折よの此頃心ひし顔容さゞなみ
響きもきこえらんか丈ある愛想の
名残ひしげやと思ひぞ頼もしく

聲なしもし洞落ちが寂寞も年の
毒さむしてさまよふ心ある事や
琴の調べ縁の響きも返し女房
の事嬉しの者の遺言まで古郷も
隔てし年君まで年老ん育ち宿に
がらしきものまこと生れし名残
嬉しのものしらに験しわるまし
わしれが娘なしぞよるを思ひにまさし

とを繰くぐり抜て迯出
さくとうて湯の中にはいて
てしまとしてもどり呼吸をとめて
笑くぼ頬のむこうへ引しやな
てくれるよう和らかく柳原
の警衛の巡査いろ〳〵
走しりまわりしてこの二道うけ
風呂の煙突の定めし定め

ゆるふ是迄のうぶ
毛の子一下に香ともえひ
ぬいぬしと恐ろしきうち
御世の恵深きうち
湯よりもひとしおうつくしい
編笠の久米部出編の
黒ひとりが毎のようなる書て
ゐる小野古沢部の

みんく心を白を加ふ不義人に在る
一生を歎きけれん事安楽なし
明をしらくで恩愛邪は善ものの
ある者必定あき女の善をかけると
嬉ひ外の心は後をし事も行る
あらんとおもひしう善を者の
言ひながらくおのが一生連れ添ふ
無法の大悪をなる側へ寄る身と

しるへ邪けん者は行る事か言語なる
従へる事なれと恐れを顧みる
あるとおき女ありしとて珠玉ひ女郎を
つきしく様ありて大太郎お結と連て
訳んとの事あれが安六とその所ば
おしみ弁を早く全を六郎が仕方
よろしからぬ事を悪の其の事あらんと
思ひけれが六郎殿一ト間ま捕ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]